全美協・メールマガジン
zenbikyou mail magazine
全国大学造形美術教育教員養成会議メールマガジン　2018.9.1 第 12 号　（毎月 1 日発行）

０，１，２歳児の造形遊び

「こども」を知り、保護者と学生が育つ

金城大学短期大学部　教授　森田 ゆかり

■「環境」としての大人

「保育所保育指針」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改定・改訂になりました。０，１，２歳児に関する記載が増え充実しました。０歳から小学校入学までの発達の連続性を考慮した保育・幼児教育を行い、それが基盤となり小中学校の「教科教育」に繋がるよう、従来からの「環境を通しての教育」のあり方を明確にしたものと理解しています。

「環境」というのはこどもたちが出会う全てです。こども達は日々の生活の中で知らない物事に興味を示し、それがどのようなものなのかを全身で確かめ探ろうとします。自然、砂や土や木、絵の具や紙などの素材も「環境」ですが、こどもの周りにいる大人が「大人の価値観」で介入してしまう「人的環境」が気になります。入園前の小さなこども達も大人（親や家族）をよく見ています。大人の言動や表情から感じ取り、影響を受けています。

本稿では０，１，２歳児の造形遊びを通して「環境」としての大人に焦点を当てます。

■ 学生がサポートする「０，１，２歳児のアート体験」

子育て支援施設で学生がサポートする「アート体験」は、16 年前から形を変えながら続いています。

2018 年度の実践より・「特化美術表現」（２年生・選択・通年９０コマ）インターンシップ

場所：おやこの広場あさがお（認定 NPO 法人による運営）
日時：第１回　2018.5.10（木）9:20～12:00
　　第２回　2018.5.17（木）9:30～12:00
　　第３回　2018.5.24（木）9:30～12:00
参加学生：２年生　各回 12 名（計 36 名）
※「おやこの広場あさがお」とは？
おもに未就園のこども（0～3 歳）とその保護者が気軽に集うことができる常設の子育て広場。子育て家庭と地域をつなぎ、地域で共に育ちあう環境づくり、こどもを産み育てやすい環境づくりを目指し活動している。
ミッション：私のこどもから私達のこどもたちへ

いつもの生活空間の一部が、学生の手によりアート体験コーナーに変身します。こどもはその様子を見ながらいつものように遊び、気が向くとこのコーナーにやって来ます。絵の具やペン、手づくりのスタンプ台、筆、たんぽなどに興味を示し、自ら手を伸ばすと遊びが始まります。この日だけは手や洋服が汚れても叱られません（最近、残念ながら例外が一例ありました）。家庭ではできない体験を一人ひとりのペースで自由に楽しめるとあって、保護者もこどもも心待ちにしているプロジェクトです。年間５～６回程度実施しており、交代で参加する学生も多くのことを学びます。

■ 学生への指導より（抜粋）

- こどもと保護者に安心感、好感を持たれるような挨拶、笑顔、言葉掛けを心がける。
- こどもが興味を持ち自ら触ってみたい、遊んでみたい気持ちになるよう働きかける。
- 一人ひとりの発達をよく見て援助する。
- こどもの驚き、不思議、感動などに共感する。
- こどもの表現には立ち入らない。

・　「じょうず」「かわいい」という言葉を安易に使わない。

保育現場でも「じょうず」という声掛けをよく耳にしますが、反射的に安易に発していることが気になります。こどもをよく見て、何を楽しんでいるのか、試しているのか、悔しがっているのかなどを感じ取れるようになってくると、学生の言葉掛けも自然にこどもの思いに寄り添ったものに変わっていきます。

■ 保護者の姿

16 年前、こどもたちは予想以上に夢中になり、遊んでいる時の表情や、描きたいように描いた絵はとても魅力的でした。手を動かすと画用紙の上に色や形が生まれることが不思議で、面白く、嬉しく、どんどん手や体を動かしたのでしょう。心の動きがいきいきとした線から伝わってきました。

一方で、予想していたことではありましたが「作品をつくらせよう」とするお母さんの思いがこどもの思いより先行し、口や手が出てしまう点が気になりました。お母さん達にとっての「作品」は、大人の眼から見てきれいで形の整ったもの、記念になるものでした。こどもの心の準備が出来ていないうちに「させよう」としたため、泣いてしまうこども、二度と手を出そうとしないこどももいました。

この苦い経験を踏まえ、翌年からはこどもの思いが尊重されるような声掛けを工夫し、保護者向けのメッセージを手渡すようになりました。文面は 16 年間ほとんど変わっていません。

伝えれば理解していただけることが分かりました。こどもがいつもとは違う環境を受け入れ自ら手を伸ばすまで「待つ」ことが出来るようになり、こどもの遊ぶ様子、いろいろ試している様子などを一緒に楽しむようになり、こどもが想定外のことをしたため親子ともども服が派手に汚れるようなことがあったとしても、それをも笑顔で受けとめられる気持ちの余裕が生まれてきました。

保護者へのメッセージより（抜粋）

お子さんの気持ちと相談して、いつでも気楽にご参加ください。

サポートする学生は、まず、こどもと保護者の皆さまが安心できる環境、こどもが絵の具や筆、ペンなどに興味を持ち、自ら「遊んでみたい」という気持ちになれるような環境づくりに努めます。

「どんな気持ちでいるのかな」「何を見ているのかな」「何を試しているのかな」「肩や肘や手や指がこんなに自由に動くようになったんだな」という眼差しで、お母さん、学生もともに楽しめるひと時になれば嬉しいです。

あまり遊ばなかったこどもにも、こどもなりの‘わけ’があるはずです。いつもと違う環境を観察したり、お兄さん、お姉さんの顔を見ることの方が楽しかったのかもしれません。眠かったのかもしれません。お友達が遊ぶ様子をじっくり見て、心の準備をしているこどももいます。そのような気持ちも大切にしたいと思います。

水で洗い落とし易く、安全性の高い絵の具・ペンを使っています。万一口に入るようなことがあっても大丈夫です。

「みんなと一緒」で行動させなければならない、きれいに作らせなければならない、汚してはいけない、困ったことが起こってはいけないという囚われ（大人の価値観）から解放されるとお母さんも肩の力が抜け、安心してこどものペース、こどもの気持ちに寄り添うことが出来るのです。そのような文化が歳月の積み重ねの中で育まれ、こどもも、保護者も、学生も、毎年少しドキドキしながらも「やってみよう」と挑戦を続けています。

最初は絵の具に触ることを躊躇していたこどもたちです。

■ 学生のドキュメンテーションより

・ 「こどもがやりたいこと」を保護者は見守っていた。
・ こどもも保護者も一人ひとり全然違う。

という記述が共通して見られましたが、「汚れることに対して抵抗のあるこども・保護者」「保護者の必要以上の介入」に関する記述も目につきました。これらの傾向は近年顕著になってきています。（絵の具が付いても差し支えない服装で参加することは事前に告知してあります。）5 月 10 日、17 日、24 日とそれぞれ参加する学生は異なりましたが、すでに参加した学生の気づきを全員で共有し、引き継ぎ、意識して対応を工夫してみました。こどもの様子、保護者の様子、学生の働きかけ、考察などを拾ってみます。

◆ 汚れることに対して抵抗のあるこどもが多数いた。

・ 絵の具がつく度にウェットティッシュで拭いている子どもがいた。
・ 絵の具で遊び始めたあたりから、絵の具が洋服に付くのが嫌なお母さんが心配そうに見ていた。
・ 手が汚れることを苦手とするこども、汚れを気にすることなく遊ぶこどもがいた。保護者が汚れることを気にしていることが多く、それもこどもに影響していると思った。
・ 使っているペンは洗濯で落ちるのか気にしている保護者がいた。洗濯で落ちることを知ってから、こどもが伸び伸びと遊んでいた。

・ 「冷たくて気持ちいいね」「きれいな手になったね」など、先生がこどもに話している言葉を真似しながらこどもと関わった。
・ 私たちが「絵の具でいっぱい遊べたね」「楽しいね」などと声を掛けたことによりこどもが笑顔になったので、声掛けはとても大切だと思った。

・ 初めは手に絵の具が付くことに抵抗のあるこどもが多かったが、周りのこどもが楽しそうに思い切り遊んでいる姿を見てから、両手を使って自由に描いたり、絵の具をこぼしてみたりと遊びを発展させ楽しそうな様子が見られた。一度スイッチが入ると止まらないこどもが多かった。
・ 絵の具のいっぱい付いた手を自慢げに見せてくれた時、楽しんでいるのが分かって嬉しかった。

・ 子どものやっていることに共感することにより、子どもが嬉しそうに自分から話すようになった。
・ 拭きたそうにしていても思い切って絵の具を付ける楽しさへと誘うと、遊びが発展していくと思った。
・ 最初は心配そうに見ていた保護者も、こども達が楽しそうにどんどん遊び込む姿を見て嬉しそうだった。

◆ 何でもしてあげるのではなく、自分で出来るように援助することが大切

・ お母さんが何でもやってあげていた。こどもは本当はやりたいことがあるのにできないように見えた。

・ 最初はペンのキャップを開け閉め出来なかったこどもに、身振りで伝えると自分で開け閉めできるようになった。

・ 多くのこども達と関わり一人ひとりの発達が見られた。何でもやってあげたくなったけれど自分で出来ることも多いので、促し、出来たことを認めるとこどもはとても嬉しそうだった。また、その気づきを保護者にも伝えられるようになった。

◆ 親が穏やかに見守ってくれるだけで…

・ 親が穏やかに見守ってくれるだけでこどもたちが素で楽しんで遊び、生活の様子が見えたり、こども達の面白いところがたくさん見られ、とても興味深かった。こどもが絵の具遊びを楽しむためには、保護者の気持ちや表情、言葉かけも大切だと思った。

・ こどもとお母さんの関係性がいろいろ見えた。

・ 保護者の顔を見ながら遊んでいるこどももいて、親の存在がこどもにとってどれだけ大切なのか（影響するのか）が改めて分かった。

こどもが絵の具の付いた手を見せた時、多くの大人は無意識に拭こうとします。日常生活で手や指に異物が付いた時、「衛生」を考えすぐに拭いたり洗ったりする延長線上の行為かもしれません。しかし、こどもは拭いてほしくて手を見せたのでしょうか。右写真のこどもは、この瞬間、どのように感じているのでしょう。それを知ることは楽しいことです。拭かないことによりもっと楽しいことが起こるかもしれません。こどもの様子を見ながら、例えば「きれいな手になったね」「楽しいね」などと声掛けすると、ほとんどのこどもは笑顔になり安心して遊び続けます。保護者が必要以上に介入しているような時、保護者を制止するのではなく、傍で困っている学生の方に指導の声掛けをすることがあります。保護者にも聞こえ、学生と保護者の両者が「こども」の眼差しに近づき、平和的に介入が減っていきます。

こどもが「やってみよう」という思いを安心して試すことができる環境をつくる過程で、保護者も学生も育っていきます。

■ 0，1，2歳児親子と関わる授業はたからもの

こどもの周りにいる大人が、遊びを通して「こども」を知り、こどものよき理解者になることが

何よりもこどもにとって幸せなことだと思います。学生のドキュメンテーションの中に『保育園や幼稚園のこどもの姿とは別の姿が見られた』『こども達の本来の姿が分かった。当たり前のことだが一人ひとり違う』という記述がありました。下の写真のこどものお母さんは「幼稚園での姿とは全然違う」と驚きながら、絵の具遊びに没頭するこどもを見守りました（2015.7　土曜日に実施）。どちらも「この子」の姿です。

造形活動は「作品」をつくらせることが目的ではなく、保育・幼児教育の本質に直結する活動で、小学校のすべての教科に繋がっていきます。保護者の眼を気にして小学校教育を先取りするのではなく、保育・幼児教育が大切にしていることを、保護者をはじめとするこどもの周りの大人に分かりやすく、具体的に伝えていく必要性を強く感じています。その鍵を握っているのは、保育者、保育を志す学生です。

一方で、絵の具や糊などが手につくことを「汚れた」と捉え、様々な素材に触れることに抵抗感を示すこども、大人、学生が増えている現状があります。保育現場での造形活動や「図工」「美術」に苦手意識を持つ一因にもなっています。そのことを踏まえた授業改善も行っていますが、保護者にも伝え共に考えたい大きな課題です。